

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
東日本大震災・復興支援関連研究(個人研究型)
2012年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属・職名		氏名	
	コミュニティ福祉学部・准教授		くが あつき 空閑 厚樹 印	
研究課題	震災後復興構想における持続可能なコミュニティ形成の方法論に関する調査研究			
研究期間	2011年度 ～ 2013年度			
研究経費	2011年度	2012年度	2013年度	総計
	500千円	500千円	500千円	1500千円

研究の概要(200～300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究の目的は、生命倫理学における共同体主義の議論を参照することで、コミュニティ当事者間によって新しいコミュニティを構想するための理念の醸成と共有を促す具体的な知見を提供することである。具体的には、持続可能な社会という視点から「意図的に形成されたコミュニティ」の調査研究を行い、その結果に基づき復興支援のための具体的な知見を提供する。これは急激な社会環境や自然環境の変化にも柔軟に対応できる力や日常の暮らしを地域に根差して自律的に営んでいくことを目指す方向性の検討を生命倫理の課題ととらえ、復興支援策を被災当事者とともに構想し提案するための方法論を明らかにすることを目的とした研究である。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[生命倫理学] [持続可能なコミュニティ] [復興構想]

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2012 年度は以下 3 点についての研究を行った。

1. 海外エコビレッジ調査および震災後形成されたコミュニティ訪問調査

1-1. 海外エコビレッジ調査

アジア、オセアニア地区の連絡会である GENOA (Gloval Ecovillage Network Oceania and Asia)に参加し、オーストラリア、バングラデシュ、カンボジア、インド、ネパール、フィリピン、スリランカ、韓国、タイにおける持続可能な暮らしに向けての実践状況および課題について調査した。その結果、いずれの国においても具体的な実践として、パーマカルチャー運動(地域の環境や伝統文化と調和した農法)、有機農業運動、伝統農法実践がみられるが、オーストラリア、韓国、日本の3か国(OECD加盟国)においては、これらは従来のライフスタイルの代替案として提示され、実践されているのに対して、他の国々においては厳しい経済、自然条件の中での一つの有力な有効かつ即効性のある方法論として位置づけられていることが明らかになった。しかし、課題としては先進国による経済的な補助に頼っているため事業の継続性の面で不安定であることが挙げられていた。

1-2. 震災後形成されたコミュニティ(エコビレッジ)訪問調査

2004年12月26日の起きたスマトラ島沖地震の津波被害にあったカルタラ(Kalutara)地区沿岸部に住んでいた住民は高台で復興後の生活を再建することになった。その際、新たな居住区はエコビレッジとすることがパイロットプロジェクトとして計画された(ダムニヤガム(Danmiyagama)エコビレッジ)。この計画は、スリランカのNGOであるサルボダヤ(Sarvodaya Shramadana Society)により主導され、国連環境計画(UNEP)や米国国際開発庁(USAID)等による資金援助を得て実施された。当プロジェクトを担当したサルボダヤ職員および、ダムニヤガム在住の住民にインタビュー調査を行った。その結果、当エコビレッジでは新たに移住してきた人々の間で交流が促進されるように共有スペースが多く作られ、地域の課題は地域に住む人々が話し合っ解決できるような仕組みが意識的に作られていることが分かった。一方で移住してきた住民の多くは漁師だったため、震災後は転職を余儀なくされ、ダムニヤガムは高台にあり仕事のある都市部からも離れているため不便であるとの意見が聞かれた。

2. 国内エコビレッジ調査

以下の実践についての情報を収集した。

共働学舎：長野県、メノビレッジ：北海道、木の花ファミリー：静岡県、アズワンコミュニティ：三重県、那須100年コミュニティ：栃木県、ゴジカラ村：愛知県、トランジション運動

その結果、都市型-農村型を一つの軸、新規形成型-伝統踏襲型をもう一つの軸として4象限を作り上記の実践を分類することで、象限ごとに共通する特徴、課題、可能性があることが示唆された。次年度この差異をより詳細に調査することで、多様な地域性を有する復興支援事業において参考になる視点を提示すること可能になると思われる。

3. バイオエシックス(生命倫理学)の議論における自然観についての文献調査

生命倫理学におけるコミュニタリアニズム議論において、自然がどのように位置づけられてきたのかについて文献調査を行った。その結果、自然環境をもコミュニティの一部としてとらえる環境倫理学の主張と共通する問題意識がバイオエシックスを最初に提起したF.Jahrの議論にはあったことが明らかになった。

研究【経過・成果】の概要 (つづき)

※ この(様式 2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ①空閑厚樹、「持続可能なコミュニティ運動に基づくコミュニタリアン・バイオエシックスの検討」『生命倫理』、23号、2012年、34-41ページ。
- ①小野直哉、空閑厚樹、佐藤太、林悦子、古橋道代、「持続可能な暮らしと生活の質の向上の両立はいかにして可能かー実践事例からの検討ー」、『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』、第15号、2013年、91-108ページ。
- ②坂田周一、浅井春夫、三本松政之、濁川孝志編著、空閑厚樹「「いのち」への配慮と持続可能なコミュニティ」『新・コミュニティ福祉学入門』1章 有斐閣。
- ④「「採掘して収奪する」生活から「育てて収穫する」生活へ——福祉の充実と持続可能な暮らしの在り方についての検討」『第24回日本生命倫理学会大会』口頭発表。2012年10月27日於立命館大学。